

人里のニエスレタ

日本ホタルの会 1997/9 第9号

ホタルを運動目標とした地域環境改善への取り組み

—朝倉川育水フォーラム—

朝倉川育水フォーラム 事務局長 西川幸孝

愛知県の東部に位置する豊橋市を流れ、豊橋市民に親しまれてきた朝倉川に、環境の指標生物であるホタルを回復することを具体的な運動目標に掲げ、平成7年6月に豊橋商工会議所が中心となって朝倉川育水フォーラムを設立した。朝倉川をショールームとして位置づけ、その再生を豊橋の環境改善の象徴的プロジェクトとし、この実践を通じ地域全体の環境改善を図っていくとしたのである。したがって、ホタルも朝倉川も最終目標ではなく、地域全体の環境改善が最終目標である。事務局は豊橋商工会議所内に設置し、現在個人会員約300名、企業・団体会員約100社の合計400会員を有するが、本年度は後述のビジョンを掲げて運動を拡大し、会員数を倍増する計画である。

さて、会の名称に使用している「育水(いくすい)」とは、この会の造語である。これまでの川づくりは、治水、利水そして親水が中心であったが、今後は多様な生き物を宿す水を育むことに努力の力点を置くべきだと考え、これを育水と命名した。育水を実践するためには、直線的でコンクリートに固められた護岸を自然に近いものに変えるなど、河川構造を多自然化するこ

とはもちろんであるが、それだけでなく、水源林の保全や川縁への植樹、生活排水の改善やゴミ投棄防止などの問題に至るまで、トータルな取り組みが必要である。逆にそれが可能となれば、川の再生は地域環境の再生につながっていく。こうしたビジョンを体系的に描くため、フォーラムでは昨年より日本ホタルの会の協力を得て、朝倉川全線にわたる「朝倉川流域ビジョン」を策定した。この指針にしたがって今後は運動を展開していくことになる。

フォーラムの主要事業としては、小中学校と連携を取りながら行っているホタルの飼育・放流、日本ホタルの会などの協力による講習会・講演会の開催、年4～5回の朝倉川通信の発行、朝倉川ゴミゼロ大会の開催などがある。ゴミゼロ大会は本年4月に開催し、朝倉川全線にわたり1500名が参加したが、半日の清掃活動でゴミ50トン、投棄された自転車38台を収拾した。護岸についても、河川管理者である愛知県のご理解により、一部の区間において多自然型への改造が実施されている。また、現在計画中であるが、朝倉川上流部の畜産場跡地を地主の好意により借用し、ビオトープとして整備する予定である。ここでは良質な水

を活用してホタルを始め多様な生物のサンクチュアリーをつくり、朝倉川あるいは街全体への生物の供給源として機能させたいと考えている。

フォーラムの具体的な運動の進め方としては、市民・企業・行政のパートナーシップによるグラウンドワーク的な推進方法を

とり、それぞれが得意分野を担当している。これは実効性のある運動を進めようとして模索したところ、結果としてそうだったということだ。ボランティア活動が21世紀の地域社会をつくると言われているが、朝倉川育水フォーラムの活動が地域社会を変えるインパクトになればと考えている。

朝倉川流域ビジョン作成に関しての活動報告

日本ホタルの会 渋江桂子

愛知県豊橋市を流れる朝倉川では、長い間、その流域でホタルの飛翔する光景を見ることができましたが、近年では、僅かに生息が確認されるだけとなってしまいました。地元の市民活動グループ、朝倉川育水フォーラムでは、ホタルをはじめ多くの水生生物が減少したこと、朝倉川全体が汚れてきたことを危惧し、朝倉川にホタルを呼び戻し、もう一度、ホタルが飛翔する美しい光景を人々が楽しもうと、朝倉川再生運動を始めていました。

日本ホタルの会では、この育水フォーラムより、朝倉川再生のための「朝倉川流域ビジョン策定」のための報告書作成が委託され、この度、その報告書をまとめました。

流域全線調査の結果、朝倉川流域には生物の生息を阻害する幾つかの要因が見受けられました。最も大きな問題点は河川の護岸構造にありました。朝倉川は水量の枯渇と多雨時の鉄砲水という二面の問題を抱えているため、これまではこの問題点に対処するために深い断面構造を持つ垂直なコンクリート護岸に改修されていました。しかし、このような護岸では、ホタルのような生物は殆ど生息できません。植物が生育できないため水温が上昇し、また生物の生息環境となる瀬や淵が欠如しているためです。また水面が人々の視線から隔離されているため河川保全を維持・管理していくう

えて根本的に重要な、水生生物と人々の触れ合いを阻んでいました。その他には、生活排水・企業排水・農薬の流入などによる水質汚染、魚類の上下流への移動を妨げる高い落差工、夜間照明が水面を直接照らすため、ホタルの活動を妨げ、多くの昆虫をトラップするなどの問題点が見受けられました。

以上に述べた問題点を踏まえ、当会はイメージパースを付加した具体的なビジョンを示しました。

1. 多自然型護岸改修への提言

現在の垂直なコンクリート護岸を、治水上の多くの制約のある中で少しでも多自然型護岸になるように改修する、一度失った自然を最大限取り戻すための問題解決方法を提言しました。簡単に紹介しますと、治水上、護岸幅は現状のままとし、護岸の片側を垂直に、もう一方を緩やかなスロープとすることを提言。垂直にした側は、植木鉢状に土を詰めることのできる護岸とし、草木が自ずから再生されるようにしました。もう一方の側面は、垂直な護岸の上部に道路面からアプローチできるような緩やかなスロープの土盛りを行い、水面近くに下りることが出来るように設定しています。河川植生には当地域に生育しているヤナギ類を植栽。また護岸の中で蛇行させた水流の緩やかな側の汀水にはセリやミゾソ

バなどを、水流の激しい瀬側の汀水は、ヨシなどを植栽し、その根により崩壊を防ぐことを設定しています。従来の落差工は多段式小落差工に改造し、自然石による小落差を提案しました。

この改修については地域住民に、ホタルを通して朝倉川再生の理解と関心を持って頂くために、ホタル再生目標区間を設定し象徴的なモデルとして取り上げました。また多雨時の水の流れを見た長期間計画の必要性を望んでいます。川の再生保全の維持管理を市民団体のボランティアと行政のタイアップへと移行することを提言、さらに地域住民が理解と関心を持ちつづけるように、隣接する多米公園・向田公園内において、小川と池を再生して朝倉川と公園を一体化し、ホタル幼虫の飼育、放流、幼虫発光上陸、成虫発光飛翔の観察などを通して、近隣の多米小学校も取り込んだ環境教育へと広げることが提言しました。

2. 各エリアの特性に合った流域の保全

再生手法の提言

川の保全・再生を試みるとき、その水源の維持は、最も基礎的な必須条件であるため、水源林を「里山」として再生することを提案、また源流域と葦毛湿原の保護、ため池群や竹林生育地、小川などの水田耕作や里山管理、農村文化を一体とした保全手法を提案しました。

3. 生物生息ネットワーク形成の提言

多種多様な生物の生息の可能性を高めるためには、川をコリドーとしたネットワークを形成する意識が必要なため、川縁への植栽（垂直的な階層性を持たせた）と里山再生を連結させることを提言。さらに、川縁の樹木というコリドーを通して移動した鳥や昆虫を、市街地において出現させるために、市街地内における公共用地、企業所有の空き地、あるいは私有地など朝倉川中・下流域における、市民・行政・企業参加の積極的なビオトープ（生物再生のための生息地）の創生を提案しました。

山梨県下部町のホタルドーム

平成9年6月13日に「ほたるサミットしもべ'97」が山梨県下部町で開催されました。8つの町の参加で始まった本サミットは、第1回を下部町で開催し、その後各町を一巡して第9回目を迎えました。さらに今回からは、新たに4町村を加えた12の町村が参加しています。

サミット前日は町内視察として下部農村文化村（ホタルドーム）や湯之奥金山資料館を見学し、夜は一色川でホタル観賞を行いました。ホタルドームに関しては、下部町より日本ホタルの会にドームの施設構想や展示内容についての監修の依頼があり、主に大場信義常任理事が対応してきまし



ホタルドームの外観



ドーム内の展示

た。

直径 17 m ほどの円筒状のホタルドームの壁づたいには、ホタル祭りの風景やホタルの一生のパネル、人工水路を作り下部町の豊かな自然をイメージしたホタルの里のジオラマ、下部町のホタルマップ、また、ホタルの幼虫とカワニナを飼育している水槽などが展示してありました。ドームの中央部にはゲンジやヘイケボタル以外のホタ

ルのパネル、ホタルの体や発光の仕組みを解説した模型などが展示してあり、さらにホタルの生活を映像で紹介するハイビジョンモニターも設置されていました。

このホタルドームは農村文化公園と一体に建設されたもので、ドーム手前のふるさと振興館では特産品の加工・展示・販売や陶芸などの体験学習もできる複合施設となっています。

第 6 回シンポジウムのご案内

日本ホタルの会では、「ホタルを通して身近な自然を考える」～人里に心なごむ自然環境を取り戻そう～とのテーマで例年シンポジウムを行っておりますが、本年も 9 月 19 日に東京において開催する運びとなりました。皆様ぜひお誘い合わせの上ご来場下さいますよう、お願い申し上げます。詳細は以下の通りです。

日 時： 平成 9 年 9 月 19 日（金） 13:00～17:30

会 場： 江戸東京博物館 〒130 東京都墨田区横綱 1-4-1

TEL 03-3626-9974

主 催： 日本ホタルの会

後 援： 環境庁・建設省・農林水産省・東京都・目黒区

資料代： 1000 円

定 員： 450 名

プログラム

13:00 開会挨拶 佐々 学（当会理事長）・来賓挨拶（東京都環境保全局）

13:10 基調講演 日高敏隆（当会会長／滋賀県立大学学長）

13:40 事例報告

「横沢入のホタルについて」

樽 良平（五日市の自然を大切にすまちづくりを考える会）

「多摩丘陵・主として八王子を中心としたホタルの現状」

小俣軍平（東京都自然環境保全審議会委員）

「武蔵野の水辺環境」

菅谷輝美（東久留米ホタルを呼び戻す会）

「目黒区駒場野のホタル」

佐久間たか子（駒場野ホタルの会代表）

「学校教育としてのホタルの飼育」

松本重樹（共立女子第二中学高等学校教諭）

- 15:00 休憩
- 15:10 各省庁による身近な自然環境保全に関する取り組みについての講演
(予定)
環境庁 野生生物課
建設省 河川局河川環境課
農林水産省 構造改善局計画部資源課農村環境保全室
東京都 環境保全局水質保全部
- 16:10 特別話題提供
「イリオモテボタルとクメジマボタルの現状と課題」
大場信義 (当会理事 / 横須賀市自然博物館)
- 16:30 総合討論・質疑応答・まとめ
矢島 稔 (当会副会長 / 東京動物園協会)
- 17:30 閉会

お申し込み方法

氏名・住所・年齢・職業・電話またはファックス番号・会員の方は会員種別を明記の上、ファックスまたは郵便で下記までお申し込み下さい。受講票をお送りします。

お申し込み締め切り 平成9年9月15日

お申し込み・お問い合わせ先 日本ホテルの会事務局

〒150 東京都渋谷区渋谷2-7-13 大一ビル2F
TEL・FAX 03-3498-3345

寄贈図書

私たちのホテル ―身近な水環境― 第8号 水と文化研究会編 1997

水と文化研究会はパソコン通信を利用して滋賀県下のホテルの生息調査を続けているが、第8号は1996年まとめとなっている。パソコン通信を利用した調査方法はリアルタイムで情報のやりとりができるというメリットがある反面、パソコンを扱えない人は参加できないというデメリットもある。通信の内容は単に発生状況だけではなく、いろいろな情報やその人の考えなども含まれていて興味深い。

「螢・人里・九州」ホタルハンドブック

キリンビール福岡工場が本会に協賛し、30周年記念事業の一環として九州地域限定ビール「九州麦酒・のどごし生」の売上金の一部で作成したのが本書である。

内容はフィールドノートと資料編の2部構成で、前半部分のフィールドノートはホタルの生息環境の保全・再生をめざして活動している人物のつづった観察ノートという形をとり、架空の人物の目を通して九州のゲンジボタルを紹介するという、これまでのハンドブックには見られないユニーク

な形式である。後半の資料編は、図鑑、生態、保護、文献の各章からなり、より詳しい資料が掲載されている。

本のタイトルに九州とあるように、このハンドブックは九州という地域性を重視しているが、これは今後よりいっそう地域の固有性をより重視していくべきであるとの考えに基づいている。なお、昨年行われた福岡県甘木市のキリンビール福岡工場と宮崎県北川町での研修会でも参加者に資料として配布、利用されている。

研修会中止のお詫び

平成9年6月20日に千葉県大原町において「豊かな人里の保全と再生の方法の実践」と題した研修会を予定しておりましたが、台風の影響でやむ無く中止となりました。前日より現地入りしておられた会員の方々には大変ご迷惑をおかけした結果となってしまいました。この場をかりてお詫び申し上げます。

訂正

「人里へのニュースレター」第8号におきまして、小西理事の名前に誤りがありましたので、訂正致します。大変失礼致しました。

(誤) 小西正泰 → (正) 小西正泰

人里へのニュースレター 第9号 平成9年9月1日発行



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

編集 日本ホタルの会 ニュースレター編集事務局
発行 日本ホタルの会

〒150 東京都渋谷区渋谷2-7-13
大一ビル2F

TEL・FAX 03-3498-3345

印刷 プリントランド・スガイ

〒239 神奈川県横須賀市浦上台2-27-936

TEL 0468-43-1356 FAX 0468-43-1366
